

郡上八幡の「卒業」飛び込み 本当の教育とは

大久保綾子
元神奈川県立高等学校教諭

2009年4月8日より、2泊3日で郡上八幡に行ってきました。桜の満開を満喫しました。板取の渓流を巡り、長良川流域は例年より10日も早い満開でそれは見事なものでした。帰りはせせらぎ街道を通って高山に抜けました。芽吹く前の淡い茶褐色の里山の美しさに驚きました。

郡上八幡は、これから町を考える上で多くのヒントを持った町でした。

友人が案内してくれました。彼は30数年前にこの町に住み着いた写真家、絵描き、釣り人、雑誌にも紹介される町の文化人、というより変人です。

その彼が、この土地では話し合いや会議で行き詰ったときなど、あとは「かんこうし」といてと言つておしまいにすることが多いのだと教えてくれました。

「かんこう」にどの漢字をあてはめるのかわかりませんが、「適当に任せて都合のよいようにアレンジする」「最後まで決めないでやりながら変えていく」「完全なものを作らずに生活に応じて生活者がやる」と言った意味に使われているそうです。

完全なものを作るとそれを維持するのに手間とお金がかかるのだと。

そういわれると、高山祭りが良い例です。高山に住む娘の話では、あの絢爛豪華な屋台は、祭りの時には近くの大学の学生にアルバイト料を払つて曳かせるのだそうです。

昔は土地の生活者がみんなで力をあわせて曳いたのでしょうが、今は、生活の匂いは消え伝統文化として観光客に供されているようです。

高山の中心街は外から通う働き手と観光客でふくれあがって見えますが、実はその中心は空洞。屋台を持つ組の者は爺さん婆さんばかり。屋台を曳く力がない。都市に出た息子娘をあてにしても、あそこまで大きくなつた祭りを盛り立てるには足りない。さりとて後からきた新しい住民に参加させるのでは余りに普段着姿で縛まりがない。アルバイト料は必要ないが、口を出される。組織を作り直さなければならない。古き良き伝統が保持できない、観光客を呼ぶにはかっこよくない、というのでしょうか、とにかく祭りの管理運営は市や町がお金を出し、観光客を楽しませる「よそ行き」のものとなっているようです。

祭りは本来その土地の住民のものであるはずだ、誰が税金を払っているのかと、毎年問題にはなるそうですが、いったん形が出来上がつたものはなかなか修正がきかないのでしょうか。

話が高山の方にずれてしましましたが、郡上に話をもどします。

郡上八幡は水と踊りの町として知られていますが、今回訪れたのは土地の子供たちが橋の上から13メートル下（観光案内などには12メートルと書かれていますが、経験者は胸を張つて13メートルと言いました。）の吉田川に飛び込むという、その川と橋を撮影するためでした（写真1）。

吉田川は町の中心を流れる川で、長良川に直角に合流しています。中でも一番の高さと深い瀬を橋下に持つ新橋では、夏には、さまざまなコスチュームやパフォーマンスで競う「飛び込みコンテスト」も行われます。



写真1 吉田川と桜 水ぬるみ春爛漫。透明度の高い水底に岩が見えます。子供たちはこの流れに身を任せて1キロも泳ぎ下ります。

土地の子供たちは、小学5年生から中学1年生までの間にこの飛び込みを「卒業」するのだそうです。それができないと一人前として認められない。

町の水路は生活用水として使われ、各水路を15, 6軒が1つの水組合を組織し管理します。そしてそこの掃除は子供たちの役目です。一人前と認められたものは、リーダーとして他の子供たちを差配します。隣の組への挨拶、連絡調整も行います。

市役所で話をした職員も6年生の時、飛び込みを「卒業」したのだそうです。別段免許状が出るのではないのですが、みんなが認めればそれで「卒業」です。

最後の卒業飛び込みは新橋で行われますが、13メートル下の水面に飛び込むまでには段階があります。

まず小学校低学年のうちは浅瀬の小駄良川で泳ぎを覚え、吉田川へとデビューしていきます。

「卒業」までのもう一つの関門に渓流下りがあります。暴れ川である吉田川を身ひとつで1キロメートルほど流れ下ります。途中岩や小さな滝が見えますので頭を打たないのかと尋ねますと、打つたらおしまいなので打たないように下るのだという答えでした。

飛び込みの方はまず低いところから始め、その岩をイチリキと呼び、次はニリキ。サンリキは新橋のちょうど半分くらいの高さ、6メートルぐらいでしょうか。そこから飛び込めたら上流にある学校橋、約10メートルの高さから飛び込みます。そうしていよいよ13メートルの新橋からの飛び込み（写真2）。

話してくれた職員は15分間橋の欄干でじっと固まっていたそうです。それをみんなじっとだまって待っていてくれる。頭の中でいろんなことを考え、死ぬかもしれないとか、とにかく沢山のことを「考えた」そうです。すごいです。小学6年生が絶壁に立って「死」を真剣に考えたのです。



写真2 新橋を臨む 四月の町は静かです。正面が新橋。奥に学校橋が見えるはずですがはっきりしません。左手前にサンリキ岩があります。夏の盛りには子供たちがそれぞれ自分の力に応じた岩から飛び込みます。

でも一度成功したあとはもう平気で、次からは簡単に飛び込めるようになったという。

私が何よりも興味を持ったのは、この数年にわたる訓練がすべて子供たちのリーダー（ガキ大将）を頂点とする子供たちの組織で行われるという点でした。

自然を相手の訓練ですから命がかかります。30年近く前のこと、子供たちを水の事故から守ろうとする全国的なPTAの動きに連動して、水組合を中心に大人たちによる監視指導体制をとった年があったそうです。

しかし、長い川のすべてに目が行き渡るよう大勢の大人が一日中張り付いているわけにはいきません。当番を決めます。当番に当たった者が等しくインストラクターとしての知識や経験を持っているわけではありません。そこで、練習場所と時間を決め、カリキュラム通り何人かが持ちまわりで指導に当たったのです。その結果、一人一人の段階に応じた指導ができず、唇の青くなった子供を岸に上げるタイミングを失ったり、先に進める子供と進めない子供の判定がはっきりせず、結局ほとんどの子供が「卒業」できなくなったりといいます。

その後間もなくこの方法では駄目だと、自然に元の形に戻ってしまい、現在まで子供たちのグループリーダーによる訓練が続いています。

今年の夏も何人もの「卒業生」が、この新橋から生まれることでしょう。

なぜカリキュラム通りの管理指導では駄目だったか。考えてみるのも面白いかと思います。

郡上八幡城に登ると眼下に、吉田川と長良川とによって縁取られた集落の固まりが魚のかたちを作つて山あいに出現します。町を歩くとすぐに川に行き当たります。釣り人も多く、人々の視線は絶えず川に注がれています。いざというときには必ず誰かしら異変に気付き、すぐに助けに行ける地形も子供たちの安全を守るのに役立つているようです。

そして何よりも、水路の掃除という地域での重要な役割を子供たちが担っていることが、子供の自立心を高めているようです。

教育のありかたもその集落にあった形があるように思いました。地元の良さは、中央から与えられた教科書には書いていないということです。「地元を大切に」は、地元の人が思つて初めて意味があるようです。